



MARCH 2011

No.19

東京大学医学教育国際協力研究センター
International Research Center for Medical Education

CENTER NEWS

www.ircme.u-tokyo.ac.jp



Contents

- 加我君孝先生牛場賞受賞記念パーティー 2
教授 北村 聖
- The Third Joint Meeting of APAME and WPRIM 2
教授 北村 聖
- JAMJE セミナー -雑誌の編集能力の向上を目指して- 2
教授 北村 聖
- AMEE 参加報告 3
講師 大西 弘高
- AMEE 参加報告 3
講師 錦織 宏
- カナダ・マギル大学訪問 3
講師 錦織 宏
- APMEC 参加報告 3
講師 錦織 宏
- 第 10 回医学教育国際協力研究フォーラム 4
特任研究員 片山 亜弥
- JICA ラオス国セタティラート大学病院
医学教育研究機能強化プロジェクト・2 月出張 4
講師 大西 弘高
- JICA アフガニスタン本邦研修 5
講師 大西 弘高
- 韓国出張報告 5
講師 大西 弘高
- インドネシア出張報告 5
講師 大西 弘高
- 2010 年度東京大学医学部 FD (医学教育研究会) 6
講師 錦織 宏・教務補佐員 澤山 芳枝
- 臨床診断学実習と共用試験 OSCE 6
講師 錦織 宏・教務補佐員 澤山 芳枝
- 模擬患者つつじの会 6
特任研究員 三木 祐子
- 東京大学医学教育セミナー 7
講師 錦織 宏・事務補佐員 三浦 和歌子
- Graham McMahon 先生滞在中の活動報告 7
講師 錦織 宏・事務補佐員 三浦 和歌子
- 日米医学医療交流セミナー 7
教授 北村 聖・講師 錦織 宏
- センター日誌／編集後記 8

加我君孝先生牛場賞受賞記念パーティー

教授 北村 聖

加我君孝先生が平成 22 年度の日本医学教育学会医学教育賞「牛場賞」を受賞されたことをお祝いして記念パーティーが 2010 (H22) 年 12 月 4 日(土曜日)に神田学士会館において開催された。

牛場賞は日本医学教育学会が初代会長の牛場大蔵先生の名を冠して制定している医学教育賞である。歴代の受賞者は医学教育研究の分野、医学教育理論の分野、そして医学教育の実践の分野からそうそうたる方々が受賞されており、医学教育の分野では最も格式のある賞である。加我先生の授賞理由は、先生が学生時代に取り組みされていた学生による教育改革（雑誌「医学教育」1 巻 1 号）から、耳鼻咽喉科領域での医学教育の実践、東京大学での医学教育改革、そして医学教育国際協力研究センター初代センター長としての功績などが総合的に評価されたものである。牛場賞の表彰状は決まり切った文言ではなく、授賞理由となった功績についてぎっしりの書き述べられているユニークなもので、加我先生のもはその中でも分量が多いものである。この表彰状は現在、医学教育国際協力センターで展示されているので一度見ていただきたい。

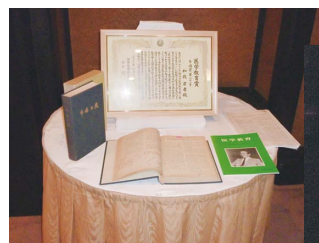
また、この賞の特徴的なことは、単に医学教育分野での功績のみならず、お人柄、人格までも選考委員が考慮することにある。ノーベル賞も、文化勲章も業績の評価のみで、人柄が配慮されるわけではないのと対照的に、教育者としてのお人柄が評価される点で

この賞はより格上ともいえる。

祝賀会は、加我先生とお親しい方々が大勢集まり、厳粛で華やかな中にもアットホームなパーティーであった。山本一彦医学教育センター長のご祝辞をはじめ、多くの方々からお祝い

のお言葉や、懐かしいお話しがあり、最後に加我先生から、相変わらずのユーモアを交えた蘊蓄に富んだお話しがありお開きとなった。

なおこの会では、若手医学教育研究者に医学教育振興財団から送られる懸田賞を今年度受賞された錦織宏講師もダブル受賞ということでお祝いされた。



The Third Joint Meeting of APAME and WPRIM

教授 北村 聖

2010 (H22) 年 11 月 3 日(水)～5 日(金)にベトナムのハノイで開催された第 3 回 APAME (Asia Pacific Association of Medical Editors)・WPRIM (Western-Pacific Region Index Medicus) 合同会議に参加した。WHO の主催で、WHO の西太平洋地域の各国から医学雑誌編集者たちが一堂に会して、この地域の文献データベースの作成と情報の共有、医学雑誌編集の質の向上について話し合った。ビジネスミーティングに次いで、2 日目 3 日目は論文執筆の向上、雑誌編集の向上のためのワークショップが開催された。開催地のベトナムではまだ医学雑誌が 10 誌程度であり、よりよい論文執筆の方法についてベトナムの若手研究者も交えて熱いディスカッションがあった。この中で、東京大学医学教育国際協力研究センターの支援のもと、ラオス国において初めての医学雑誌が発行されたことが報告され満場の拍手を受けた。

ラオス人によるラオス語の(要約は英語)雑誌の発行は、医学研究の第一歩であり歴史的な発表であった。来年は韓国で開催される。



▲ 参加者記念写真

JAMJE セミナー —雑誌の編集能力の向上を目指して—

教授 北村 聖

日本医学雑誌編集者会議 (JAMJE) セミナーが、東京大学医学教育国際協力研究センター主催、日本医学会後援の下、2010 (H22) 年 11 月 16 日(火)に日本医師会館小講堂で開催された。

日本医学会の高久史磨会長の開会挨拶の後、講演 1 として「Strategic Journal Development」と題して WILEY-BLACKWELL, Associate Editorial Director Mr. Chris Graf が日本における、そして世界において多くの医学雑誌を発行する戦略について話された。ついで講演 2 「Advancing Science and Learning: Lessons from the New England Journal of Medicine」と題して、東京大学医学教育国際協力研究センター 特任准教授 Dr. Graham McMahon 先生が講演された。彼は Harvard Medical School, Assistant Professor であると同時に、The New England Journal of Medicine の Editor として、特に教育的コンテンツを開発しており、医学雑誌の教育的機能について分かりやすく話された。



▲ 演者 Dr. Graham McMahon



▲ 演者 Mr. Chris Graf

AMEE 参加報告

講師 大西 弘高

AMEE2010は、2010年9月4～8日に英国グラスゴーで開催された。今回は、ラオスでの臨床教育改善に関する取り組みについて講演「ラオスでの卒前臨床教育の改善:中央から各県へ」を行うのが主目的であった。臨床教育全般に関するセッションに入っていたため、途上国での臨床教育モデルの普及といった本質的な議論はなされることがなく、座長からラオスでの状況に関する一般的な質問がなされた程度で終わった。

学会全体の感想としては、AMEEも専門分化が徐々に進んでいるという印象を受けている。すなわち、医学教育全般に関して学びたいというようなニーズよりも、徐々に医学教育の中で一部分に関する研究成果を発表したり、その部分の知見を集めたりといった、各自の専門分野にあった形での参加が増えているという意味である。学問分野の発展、拡大と共に、これは避けられない方向ではあると思われるが、今後ますます全体像をしっかりと把握することが難しくなっていく可能性が高まる。

日本からのAMEEの参加者は、今回30名近くに及んだ。参加者は、教育研究に日常的に関わるという人よりは、教育を広く実践・管理している人が多い印象を受けた。そういった先生方は、どちらかという医学教育、医療者教育全般に対し、ジェネラルな姿勢で受け止めているだろう。徐々にAMEEが大きくなりすぎて、日本からの参加者のニーズから離れていく可能性もあるが、学会の変化に注目していきたいと感じた。



▲ 朝日に輝くグラスゴー郊外の町並み

講師 錦織 宏

2010年9月4日～8日にかけて、英国スコットランドのグラスゴーでAMEE（欧州医学教育学会）が開催された。AMEEには2004年から毎年参加・発表しているが、今年は開催地が自分の留学先であったダンディーに近いこともあって、渡英はなんだか故郷に帰るような気分であった。トロント大学のWilson Centreのメンバーが主催するプレカンファレンスワークショップに参加して質的医学教育研究について知見を広めたり、東大で実施している研究者育成のためのFaculty Developmentについての発表をしたりと、今年もなかなか充実した学会になった。また留学時代の恩師や同級生にも会って旧交をあたためることもできた。

2004年の学会に私が初めて参加した際、日本からわずか7名しか参加していなかったAMEEであるが、近年は日本人の参加が増えてきている。昨年に引き続き（今年は九州大学の菊川誠先生と一緒に）幹事を務めさせていただいたJapan Nightには今年は20名以上の参加があった。世界中から医学教育者が集まるこの学会はますます盛況になる勢いで、ぜひ今後も参加していきたいと考えている。



▲ 2010 AMEE Japan Night in Glasgow

カナダ・マギル大学訪問

講師 錦織 宏

2010年12月5日～10日に、全国80大学のモデル・コア・カリキュラムの改訂を目的とした文部科学省先導の大学改革推進委託事業「医学・歯学教育の改善・充実に関する調査研究（委員長:名川弘一先生）」の活動の一環として、奈良信雄先生（東京医科歯科大学）・西城卓也先生（名古屋大学）とともにカナダのマギル大学を訪問した。今回の滞在では、カナダのコア・カリキュラムであるCanMEDSの枠組みや臨床実習のあり方などを再度確認し、日本のコア・カリキュラム改訂にあたって自己相対化のための視点を提供することが目的の一つである。研究班の活動の都合でマイナス10度を下回る極寒の時期にモントリオールに滞在することとなったが、リンダ・スネル教授（当センター元客員教授）のアレンジもあって、情報収集および現地の先生方との議論は充実したものとなった。詳細は報告書を参照されたい。



▲ 降雪の中のマギル大学医学教育センター

APMEC 参加報告

講師 錦織 宏

2011年1月26日～29日にかけてシンガポール国立大学で開催された第8回アジア太平洋医学教育学会（8th Asian Pacific Medical Education Conference）に、招待演者として参加した。本誌の昨年のAPMECの報告でも少し触れたが、今年の同学会では、現在行っている身体診察と臨床診断推論を組み込んだ教育・評価法（Hypothesis-Driven Physical Examination）の研究活動の一環として、プレカンファレンスワークショップで開発した教育モデルを紹介した。既に本邦では何度も様々な形で紹介してきた内容であるが、国外でワークショップの形で紹介するのは初めてであった。教育モデルの内容をまとめた論文がMedical Teacher誌に掲載されることになり、また英語版DVDの開発・紹介ができたこともあってか、参加者の反応は驚くほどよいものであり、教育モデルの転移可能性について自信を持つことができた。この研究については今後さらに発展させていきたいと思っている。



▲ ワークショップ参加者とのInteractive Discussion

第10回医学教育国際協力研究フォーラム

特任研究員 片山 亜弥

当センターでは、医学教育研究・国際協力による人づくりについて議論する場として、年1回医学教育国際協力研究フォーラムを開催してきた。3月4日(金)に第10回となるフォーラムを「グローバル人材の育成に対する東大での取り組み」をテーマに行った。東京大学は、2010年10月に独立行政法人国際協力機構(JICA)と連携協定を締結し、さらなる国際貢献が期待されるなか、グローバル人材育成について全学として議論する良い機会であると考え、国際本部との共催により本フォーラムが企画された。フォーラムの趣旨に賛同した田中副学長やJICA大島副理事長にもご出席いただき、冒頭で挨拶をして下さった。

第一部では、国際本部がグローバルキャンパス形成等の取り組みについて、JICAが大学連携の意義や取り組み等について述べ、組織としての方針や課題について明らかになった。第二部では、グローバル人材育成を教育現場や国際協力活動において実践している東大教員が講演を行い、具体的な取り組みについて部局を超えて共有することができた。第三部のパネルディスカッションでは、学生から大学に対して期待す



▲ パネルディスカッションの様子

ることや他大学からの提案などが参加者より忌憚なく述べられ、東大が抱えている課題について問題意識を新たにすることができた。

最後に、ご出席下さった参加者の皆さま、ご挨拶、ご講演下さった先生方、文部科学省、JICA、東京大学国際本部の関係者の皆さまにこの場を借りて深く御礼申し上げたい。

<プログラム>

- 開会の挨拶 東京大学 田中明彦理事・副学長
文部科学省挨拶 文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室
梅津徑国際協力調査官
国際協力機構挨拶 JICA 大島賢三副理事長
- 第一部 講演 ～本部およびJICAの取り組み～
(1) 東京大学国際本部国際部 佐藤修二郎
「東京大学におけるグローバルキャンパスの形成等の取り組みと課題」
(2) JICA 国内事業部 大金正次長
「グローバル人材育成における国際協力(JICA)とアカデミズム(大学)連携の意義と課題」
- 第二部 講演 ～部局における取り組み～
(1) 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 堀井秀之教授
「国際プロジェクトコースとi.schoolにおけるグローバル人材育成」
(2) 東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻 堀田昌英教授
「東大生が国際協力事業に加わる時」
(3) 東京大学医学教育国際協力研究センター講師 大西弘高
「途上国の医師養成システムの改善」
- 第三部 パネルディスカッション
開会の挨拶 東京大学医学教育国際協力研究センター 錦織宏講師

JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクト・2月出張

講師 大西 弘高

JICA ラオス国セタティラート大学病院医学教育研究機能強化プロジェクトは、2007年12月から3カ年の予定で始まったため、2010年11月末で終了となった。この間、大西は9月13-27日(15日間)と10月1-30日(30日間)、北村聖教授が10月13-26日(14日間)専門家としての派遣となった。また、東大チームとして、神馬征峰教授(東大国際地域保健学)が10月5-16日(12日間)、高村昭輝医師(城北病院)が9月14日～10月7日(24日間)、矢野桂子医師(三重大学)が10月2-31日(30日間)同時期に派遣された。

同時期に行われたイベントとしては、第3回医学教育シンポジウム(テーマ:大学医学部と教育病院のコミュニケーション、場所:健康科学大学、日時:2010年9月15日8:30～16:15)、第4回医学教育シンポジウム(テーマ:ラオスでの地域基盤型医学教育、場所:ランサンホテル、日時:10月27日8:30～16:10)、第7回プロジェクト合同委員会(場所:セタティラート病院、日時:10月28日9:30～12:00)があった。いずれにおいても、保健省から大臣や副大臣が出席するなど、国内の注目を集める会合となった。

これらのイベントで指摘された今後の改善点は、①市内各病院に毎日訪れる4年生は、十分な実習ができていない、②2年間で修了できる家庭医療研修プログラムは、給与体系などとの連携において他の3年間プログラムに比べて不公平に有利である、③医学部の臨床部門をなすChairシステムが有効に機能していない

科がある、といった点である。①は2010年に4年生の実習内容が拡大されてから顕在化した問題だが、医学教育ユニットに4年生を含むかどうかは、今後の課題であろう。②は保健科学大学が教育省管轄から保健省管轄になったことと関連している。研修プログラムで得られる認定医の称号に関して、教育省が承認過程に未だ関係していることが原因とも言える。③はChairシステムを研修管理委員会に変更していけばよいが、Chairシステムの利点も残っているため、国全体の対応が簡単ではない。今後もこれらについて、フォローアップが必要であると考えている。

2011年2月11～19日には、セタティラート病院開院10周年記念行事に招かれて訪問し、「セタティラート病院での臨床教育の更なる改善」と題した記念講演を行った。臨床教育改善には、指導者、カリキュラム、研修組織の3つの改革が必要であること、指導者に関して指導者研修は数多く実施してきたが各自の臨床能力向上も組み合わせる必要があること、カリキュラムに関しては評価を見直す必要があること、研修組織に関しては評価やインセンティブのシステムが必要なことを指摘した。保健科学大学に教育開発センターができるなど、いくつかの改革が進んでおり、今後の発展が期待された。



▲ 保健科学大学卒業式で学長を囲んで記念写真

JICA アフガニスタン本邦研修

講師 大西 弘高

アフガニスタンから医学部教員を招いての研修は、2009年度から医学教育プロジェクトのフォローアップスキームでの実施となっており、2010年度は2つのグループが来訪した。いずれも、カブール医科大学が6名、ナンガハール大、ヘラート大、バルフ大の医学部から各2名、カンダハール大、シェイクザイード（ホースト）大、アルペロ二大の医学部から各1名の計15名で予定された。

2010年度第1グループに対する研修は、10月18日～11月25日の予定で実施されたが、結局は2名が直前に来訪を取りやめて13名の体制となった。このグループに対するプログラムは錦織講師が初めてコーディネートすることになり、課題を与えて振り返りレポートを提出してもらうという新しい試みを行った。課題は3つで、研修員はグループで記載してよいというルールであった。グループでの記載により、振り返りがより深まるという効果がみられたが、グループ内で若くて英語のできる教員に負担が大きいという意見が多かった。

研修旅行では、日本の古都、京都に位置する洛和会音羽病院を訪れた。同病院は錦織講師の研修医時代の恩師が院長を務める病院で、米国より大リーガー医を招いて臨床教育を行っているという特徴がある。同院では米国型の臨床教育の実践現場（例：ベッドサイドでの回診など）を見てもらい、研修生にアフガニスタン・日本とはまたさらに異なる視点を得てもらった。アフガニスタン紛争ではある意味敵対関係にあった両国の医師たちが、同じ屋根の下で医学教育を語る風景から、医療に国境はない

ことを再認識させられた。

2010年度第2グループは、予定通り15名が来訪し、2011年1月12日～2月23日の日程で研修を行った。振り返りレポートに関しては、課題は同様に3つ（自施設のニーズ評価、研修旅行で学んだこと、地域基盤型医学教育について）であったが、今回は個人での記載をしてもらうことにした。おそらく、英語が非常に苦手なメンバーは若手の英語の出来るものを通じてレポート記載したのだろうが、問題なく各自がレポートを提出することができ、また前回とは異なり、レポートに関するネガティブな意見がほとんど出なかった印象であった。

研修旅行では岐阜大学および岐阜県の揖斐郡北西部地域医療センターを訪問した。揖斐では、職員やデイケアのボランティアの人たち、そして訪問診療先の患者さんたちに歓迎され、旧き良き日本を味わってもらうことができた。当日、大雪に見舞われたものの、逆に訪問診療の意義を再認識させられた。

このように、研修の担当を変更するという初めての試みは、様々な刺激や気づきを生み、全体的にみれば改善につながったと思われる。2011年度も引き続き2グループが来日する予定だが、研修計画を立て、実施していくことが我々の教育者としての学びにつながっていることは間違いない。



▲ 大雪の中訪問診療先を見学

韓国出張報告

講師 大西 弘高

このたび、2010年11月28日～12月3日の日程で、韓国の医学教育に関して情報をアップデートすることができた。主な目的は、①韓国医師国家試験実技試験の状況確認、②シミュレーション医学教育、特にSP（標準模擬患者）育成に関する現状調査、③医学教育認証評価の現状調査の3点であった。

①については、正式実施2年目となり、韓国医療国家試験院の関係者も自信を深めている様子であった。また、国家試験に落ちた100名強の学生たちが国家試験院を訴えた訴訟は、訪問後しばらくして国家試験院が勝訴したという情報が入っている。全国の医学部は、実技試験に合わせたカリキュラム改革を急ピッチで進めているが、肝腎のクラークシップ実質化がなされていないという恨み節も一部では聞かれた。

②については、京畿道 SP コンソーシアムで研究を含めた取り組みが進んでいること、カトリック大のシミュレーションセンターで模擬患者プールが350名に至ることなど、目覚ましい進歩を遂げていることが目立った。①との関連で、各大学において SP 養成・管理に関わる教員の地位が日本よりはるかに高いと感じられた。

③については、現在韓国医学教育学会会長の Ducksun Ahn 氏（高麗大）が会長を務める KIMEE (Korea Institute of Medical Education and Evaluation) の年次会議に出席した。KIMEE は 2003 年に設立された医学部認証機関であり、この会議において改めて評価基準の見直しが進められていた。



▲ 韓国カトリック大のシミュレーションラボの中央管理室

インドネシア出張報告

講師 大西 弘高

2010年12月9～12日にインドネシアへ出張の機会を得た。今回のインドネシア訪問の目的は、2010年8月に医学・保健学部教員への研修を行ったイスラム大学でのフォローアップおよび講演、そして第3回ジャカルタ医学教育会議への出席および講演であった。

イスラム大学医学・保健学部では、2010年秋に新しい校舎が JICA の有償資金協力（円借款）によって設立された。4階建てで、風通しのよい明るい校舎には、大規模なシミュレーションセンターなども設置されていた。12月10日の訪問時、2011年度に予定されている事務職員研修の概要を決める話し合いがなされたと共に、私は医学科・看護学科・薬学科・公衆衛生学科の学生らに対し、Interprofessional education に関する講演も行った。宗教省立の大学であり、地域に如何に裨益するかという意識が高い学生たちとのインタラクティブなやり取りが出来て楽しかった。

インドネシア大学医学部で12月11～12日に行われたジャカルタ医学教育会議では、医学部入学者選抜における質保証というテーマの講演を行った。学生選抜の評価からの視点、認証評価において重視されている内容、実際に入学者選抜を行った後のアウトカムによるフィードバックのかけ方の3点に分けての内容となった。講演後に、一つの大学から講演依頼を受けたり（残念ながらスケジュールの関係で訪問できず）、質問を受けたりといった反響があった。



▲ インドネシアイスラム大の新校舎の大講義室

2010 年度東京大学医学部 FD (医学教育研究会)

講師 錦織 宏・教務補佐員 澤山 芳枝

2011年1月8日(土)に8回目となる東京大学医学部FD(医学教育研究会)を実施した。今回は過去2回の研究者育成に関する議論の内容を受け、「社会変化の激しい時代の東大の医学教育の責務」をテーマに掲げた。今年もKJ法のワークショップで参加者の先生方に同テーマについてご議論いただいたが、東大医学部の「研究医育成」という明確な目標をカリキュラムに落とし込める形の「コンピテンシー(能力)」に展開できたように感じている。現在進

(プログラム)

9:00 ~ 9:15	開会挨拶 (清水孝雄医学部長)
9:20 ~ 10:50	医学教育改革に関する公開討論会 基礎医学系カリキュラムについて (栗原裕基教授) MD 研究者育成プログラムについて (狩野光伸講師) 研究医増 WG について (岡部繁男教授) 臨床研究者育成プログラムについて (國土典宏教授) 社会医学カリキュラムについて (神馬征峰教授) 学生支援について (矢富裕教授) 学生組織について (学生代表)
10:50 ~ 11:50	各教室からの教育取り組み紹介
10:50 ~ 11:20	消化器内科学 (小池和彦教授)
11:20 ~ 11:50	法医学 (吉田謙一教授)
13:00 ~ 14:30	ワークショップ 「社会変化の激しい時代を生きる東大医学部生に卒業時まで身に付けてもらうコンピテンシー(能力)とは?」
14:45 ~ 15:45	教育ポートフォリオ発表会—若手教員の教育活動紹介 萩野昇(アレルギー・リウマチ内科) 龍野柱太(感染制御部) 田上佑輔(腫瘍外科) 軍神正隆(救急部)
15:45 ~ 16:45	各教室からの教育取り組み紹介
15:45 ~ 16:15	精神医学 (笠井清登教授)
16:15 ~ 16:45	神経病理学 (岩坪威教授)
16:45 ~ 17:00	修了証贈呈・開会挨拶 (小池和彦教務委員長)

められている医学教育改革WGの活動にも反映させていきたい。

また今回のFDでは開催後初めて、学生が参加し、また発表する形をとった。午前中の公開討論会の部分のみではあったが、昨年秋に結成された学生WGの代表が、現在行っている活動について紹介した。医学教育の主役である学生の声をこのような場で教員がしっかりと聞くことのできるシステムを構築できたことも、今回のFDの成果であろう。今後も医学教育への学生の主体的な参加をサポートしていくことを計画している。

さらに今回のFDでは、若手教員の先生方に「教育ポートフォリオ発表会」という形で、普段の教育活動を紹介いただいた。今回ご発表頂いた4名の先生方は、いずれも学生や研修医のロールモデルになっている優秀な方たちであったこともあり、参加者の先生方からは大きな反響を頂いた。今後は教育業績評価の一つの形を目指し、来年以後も続けていければと考えている。

FDでは普段あまり接しないような先生方との「異文化コミュニケーション」の場を提供できていることが強みであるが、今年はその幅をさらに広げることができたように感じている。来年度以後も引き続き、医学部教員の先生方の積極的なご参加を期待したい。



▲ 2010年度東京大学医学部FD参加者

臨床診断学実習と共用試験 OSCE

講師 錦織 宏・教務補佐員 澤山 芳枝

当センターは従来、臨床診断学実習に直接・間接に協力している。本年度の同実習では「カルテの書き方」「HDPE」「NEJMを用いた診断推論」において教材を開発・提供した。また「技能実習」ではシミュレーターの使用に関する指導をセンター教職員が担当している。「模擬患者による医療面接実習」については、前号のセンターニュースで紹介したとおりである。

またこの臨床診断学実習の仕上げという位置づけでもある共用試験OSCEは、本年度は2月5日(土)に実施した。医学部医学科のM2学生101名が昨年同様、6つのステーション(医療面接・頭頸部・胸部・腹部・神経・救急)の試験を受験した。当日は評価者として教員が54名、M1学生も含めた模擬患者が43名、医学部事務が25名、センター教職員が4名、運営に携わった。また今年度より身体診察救急のステーションを3列から4列に、医療面接ステーションを5列から7列に増設した。会場が3カ所に分かれることになったが、大きな問題なく無事に終わり、また総試験時間も減らすことができた。本OSCEに関係した皆様にこの場を借りて御礼申し上げる。



▲ 頭頸部ステーションでのOSCEの様子

模擬患者つつじの会

特任研究員 三木 祐子

今年度の模擬患者活動は、医学教育の授業やOSCEのみならず、当センターのアフガニスタン本邦研修の一環として実施されたTeaching medical interview collaborating with SP(名古屋大学 阿部恵子先生)の講義演習への参加(medical interview demonstration)、看護学の授業参加(通常授業ではなく、研究のために構築し、実際に看護系大学の看護学生に参加協力頂いたオブショナル授業)とこれまで以上に活動の域が広がった。本会の模擬患者の方々は、様々な活動に対し、毎回積極的に参加を希望し、かつ大変熱心に取り組まれている。また、医学教育を中心に様々な分野の教育の向上に貢献することを望んでおり、我々にとっても非常に嬉しい、頼もしい限りである。

今年に入り、本学とコンソーシアムの形で模擬患者教育を行っている東京医科歯科大学のメンバーが一新した。今秋で本会運営も4年目に突入するが、今年はさらに模擬患者の質向上を図り、よりよい医療者教育の提供を目指したい。



▲ アフガニスタン研修における模擬患者参加

東京大学医学教育セミナー

講師 錦織 宏・事務補佐員 三浦和歌子

今期の東京大学医学教育セミナーは下記の内容を実施した。
(プログラム)

回	開催日	演 題	講 師
第 26 回	2010.9.27	人材育成のあり方を見直す：職場学習の観点から	中原 淳 東京大学 大学総合教育研究センター 准教授
第 27 回	2010.10.7	① Medical Education in Toronto ② From Traditional to Outcome-based Medical Education - Results of a Randomized Controlled Trial at the Ruhr University, Bochum, Germany ③ Teaching Modules in Pathology Education	①ヘレン・P・バティ トロント大学医学部地域家庭医学教授 ②トルステン・シェーファー ドイツ ルール大学医学教育センター長 ③ウルズス・ニコラウス・リーデ ドイツ フライブルク大学解剖学講座教授
第 28 回	2010.11.12	Assessing Clinical Competence: Lessons from the USMLE Clinical Skills Examination	グレアム・マクマーン 東京大学医学教育国際協力研究センター 特任准教授、ハーバード・メディカル・スクール講師
第 29 回	2010.12.3	Optimizing Resident Education: Strategies and Evidence	同上
第 30 回	2011.1.17	医学教育とプロフェッショナリズム	大生 定義 立教大学社会学部教授、横浜市立大学医学教育学臨床教授
第 31 回	2011.2.23	In Pursuit of the Ideal Mix: the Medical Undergraduate Curriculum of Faculty of Medicine, University of Colombo, Sri Lanka	ゴミンダ・ボナンペルマ 東京大学医学教育国際協力研究センター 特任准教授、コロボ大学医学教育開発研究センター講師
第 32 回	2011.3.17	In Selection, Some Test Formats Work; but Some Do Not	同上

第 26 回(中原淳先生)では、職場での人材育成について考察する際に、小グループでレゴを使いながら、現在までの社会人としての成長を各自紹介しあう時間が設けられたのが興味を引いた。第 27 回は長崎大学・奈良県立医科大学との共催としてカナダから 1 名、ドイツから 2 名の講演者を迎えた国際色豊かな会となった。講演内容からは離れるが演者の方々が日本文化や戦争の悲劇にも特別の関心を示されたことが印象に残った。第 28 回と 29 回は当センターが 3 ヶ月間招聘したハーバードのグレアム・マクマーン先生による講演であった。第 28 回では多くの学生を含む 93 名の聴講者が集まったことは特筆に値する。同先生には滞在期間中、医学生や研修医にかなり積極的に関わってもらったこ

とが大きな影響を与えたのであろう。第 30 回(大生定義先生)では、医学教育分野におけるプロフェッショナリズムについて、総括的な講演をいただき、文化や歴史などに言及した活発な討論をすることができた。

なお本セミナーは講師の了承を取ったうえでビデオに収録したものをオンラインで視聴できるようにしている。当センターのホームページ(<http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp>)からアクセスできるので、ぜひご視聴いただきたい。



Graham McMahon 先生滞在中の活動報告

講師 錦織 宏・事務補佐員 三浦和歌子

2010 年 9 月 21 日～ 12 月 16 日にかけて、Graham McMahon 先生が当センターに特任准教授として滞在了。McMahon 先生はもともと米国ボストンにある Brigham And Women's Hospital に勤務する糖尿病・内分泌内科医であり、同病院はハーバード大学の関連病院として知られている。もともと同先生の出身はアイルランドのダブリンで、大学(Royal College of Surgeons in Ireland)を卒業後に渡米された方だ。

さて McMahon 先生の滞在を振り返ると、これまで当センターでは数多くの外国人客員教員を招聘してきたが、これほど激務だった客員教員もいなかっただろう。先生のスケジュールとして、毎週月曜午後には東大病院で研修医を対象としたケースカンファレンス。別に週に 1 回夕方、医学生向けのケースカンファレンス。また錦織が月に 1 回ファンリートしている New England Journal of Medicine (NEJM) の Clinical Problem Solving を題材にした勉強会でも、同誌の医学教育担当 Editor として様々なコメントをしてもらった。そして、それぞれの勉強会で事前に担当の研修医や医学生への指導や打ち合わせが入ったため、McMahon 先生のオフィスには人が絶えなかった。実践者としても、また研究者としても、まさに医学教育専門家としてのロールモデルだと強く感じた。



▲ New England Journal of Medicine の Clinical Problem Solving / Interactive Medical Cases の勉強会

日米医学医療交流セミナー

教授 北村 聖・講師 錦織 宏

医学部図書館の当センターのお隣に国際交流室がある。海外からの留学生のお世話や、東大の学生の海外留学のアレンジなどを行っており、当センターも何かにつけてお世話になっている部署である。その同交流室が昨年 10 月、日米医学医療交流財団と共催の形で丸山稔之講師が世話人の一人となり、日米医学医療交流セミナーを実施した。そのセミナーに当センターからも北村が座長、錦織が演者の形で参加した。

同セミナーでは、学生時代の短期臨床留学経験者、研修医としての長期臨床留学経験者、そして研究留学経験者がそれぞれ、自身の留学経験を語った。財団の趣旨もあってか米国留学経験者が多かったが、他国への留学経験者の話も聞くことができた。近年、日本人の内向き志向が問題になっているとされているが、ぜひ学生さんや若手の先生方には、臨床や研究のみならず、海外に住むという貴重な経験を通して、異文化コミュニケーション能力を身につけてもらいたいと考えている。



▲ 日米医学医療交流セミナーでの一コマ

● 今後の外国人客員教員招聘スケジュール

東京大学医学教育国際協力研究センター外国人客員教員として次の先生をお迎えする予定です。

クラレンス・クライター (Clarence D. Kreiter, Ph.D)

現所属：米国 アイオワ大学医学部 家庭医療学教室・医学教育研究支援室 教授

招聘予定期間：2011年7月～12月

外国人客員教員の招聘にあたり、米国財団法人 野口医学研究所に多大なご支援を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。

● センター日誌 | 2010年9月～2011年3月 |

9 SEP		12 DEC	
10日(～12月10日)	M2 PBL チュートリアル教育	3日	第29回東京大学医学教育セミナー (グレアム・マクマーン ハーバード・メディカル・スクール)
13日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会・健康講座	13日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会・健康講座
13日～27日	JICA ラオスプロジェクト現地活動(大西)	1 JAN	
21日	グレアム・マクマーン ハーバード・メディカル・スクール 外国人客員教員着任(12月16日まで)	8日	東京大学医学部FD(医学教育研究会)
27日	第26回東京大学医学教育セミナー (中原淳 東京大学 大学総合教育研究センター 准教授)	12日(～2月23日)	平成22年度第2回アフガニスタン医学教育研修受け入れ
10 OCT		17日	第30回東京大学医学教育セミナー (大生定義 立教大学社会学部教授、横浜市立大学医学教育学臨床教授)
1日～30日	JICA ラオスプロジェクト現地活動(大西)	2 FEB	
7日	第27回東京大学医学教育セミナー (ヘレン・P・パティ トロント大学医学部地域家庭医学教授 トルステン・シェーファー ルール大学医学教育センター長 ウルズ・ニコラス・リーデ フライブルク大学解剖学講座教授)	5日	共用試験 OSCE
13日～26日	JICA ラオスプロジェクト現地活動(北村)	7日	ゴミンダ・ボナンペルマ コロンボ大学医学部 教員 外国人客員教員着任(3月28日まで)
18日(～11月25日)	平成22年度第1回アフガニスタン医学教育研修受け入れ	14日	「模擬患者つづしの会」自主勉強会
18日	「模擬患者つづしの会」自主勉強会	23日	第31回東京大学医学教育セミナー (ゴミンダ・ボナンペルマ コロンボ大学医学部講師)
27日(～1月12日)	臨床診断学実習(New England Journal of Medicine を用いた診断推論)実施	3 MAR	
27日(～1月19日)	臨床診断学実習(第2回医療面接実習)実施	4日	第10回医学教育国際協力研究フォーラム
27日(～1月26日)	臨床診断学実習(HDPE 身体診察診断学学習とシミュレーターを用いた技能実習)実施	8日	平成22年度第3回運営委員会
11 NOV		17日	第32回東京大学医学教育セミナー (ゴミンダ・ボナンペルマ コロンボ大学医学部講師)
16日	平成22年度第2回運営委員会	23日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会・健康講座
12日	第28回東京大学医学教育セミナー (グレアム・マクマーン ハーバード・メディカル・スクール)		
22日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会・健康講座		

■ 編集後記

寒さの中に春の気配を感じる頃となりました。

今号の表紙は、アフガニスタン医学教育研修での写真を使用しております。センターでは、アフガニスタン医学教育本邦研修を今年度2回受け入れ、計28名のアフガニスタン研修員がセンターを訪れました。文化の違いを新鮮に感じながらも、とても賑やかで楽しい毎日を過ごすことが出来ました。

さて、みなさまのお手元にこのセンターニュース No19 が届くころには、平成22年度も幕を閉じ、新年度がスタートしている頃と思います。皆様にとって素敵な1年になりますようお願い申し上げます。(岩)



■ 発行元

発行 2011年3月29日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社トライ